

# 作業の一部で実践

## 導入前に可視化が重要

人手不足に対応するため、自動・省人化の動きが中小企業でも広がっている。NTTデータグループでコンサルティングなどを行うクニエの大室翔史マネージャーは、

一方、投資資金に限りのある中小では、作業工程の一部で自動・省人化を図る動きが出ている。

例えばある物流企業では、商品を入れた段ボール箱のこん包を自動で行うことができる機器を導入している。少ない人数で作業を行えるようにした。

今後でも人手不足が改善される見込みは薄く、中小でも自動・省人化に向けた取り組みが欠かせない。だが、大室マネージャーは「機器導入が必ずしも省力化や生産性向上が実現するわけではない」とし、「まず現状の業務を見える化することが重要」と指摘する。

### 中小の自動化・省人化

「業務の生産性やコストの見える化し、必要な部

分を見極めて機器を導入することが失敗しないポイント」と話す。

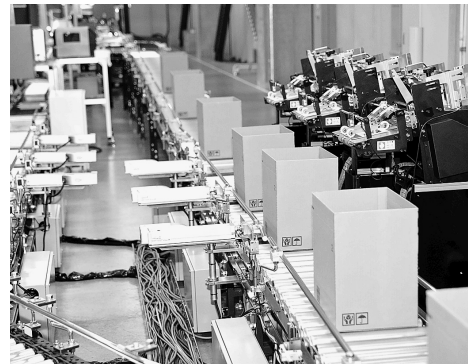
ドライバーと同じく人手不足が顕在化している物流センターなどの庫内作業員。課題解消に向け、大手では大型マテハン機器やAGV（自動搬送機）の導入を通じ、作業工程の全般で、人の介在が少ない作業形態の構築を進めている。

別のアパレル物流を手掛ける企業では、製品管理でRFID（非接触型ICタグ）を活用。読み取り機器により、入荷した商品の検品、ピッキング業務の効率化を進めている。現場作業ではないが、他の企業では事務作業のRPA（ロボットによる業務自動化）を推進することで、配送データ加工処理の自動化などに取り組んでいる。

### 生産性やコストの見える化が必要

具体的には、各作業にかかった時間の計測、手間の確認といった工程の生産性、コストを数値化することで、どこに機器の導入が必要なのかが明確になり、効果も想定しやすくなるという。

生産性やコストの数値化は、通常の業務の中で行う必要があり、現場に負担がかかる作業でもある。だが「自動・省人化には避けられない工程。追加の業務ではなく、不可欠な業務と考えて行っている」（大室マネージャー）。



中小企業では作業の一部自動化が行われている（写真はイメージ）